

2026 年 9 月 6 日（聖霊降臨後第 15 主日、A 年特定 18）

メッセージ

「赦しの共同体」

（マタイによる福音書 18:15-20）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音の直前には「迷い出た羊」のたとえがあります。それは、「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」と結ばれます。神は、たった一つの命であっても失われることを望まれません。

今日の福音には、罪を犯したきょうだいにどう向き合うべきかが記されています。大切なのは、その目的が「きょうだいを得ること」だという点です。相手を言い負かし、裁き、排除することではありません。罪によって傷ついた関係を取り戻すことが目指されています。

誰かの「不祥事」が報じられると、インターネットを中心に大勢の人が一斉にその人を非難し、社会から排除しようとすることがあります。しかし聖書が求めるのは、それとは異なる道です。まず二人で話し、聞き入れられなければ一人か二人と共に、それでも難しければ教会に申し出ます。問題をすぐ大勢の前にさらさず、相手の尊厳を守りながら、和解への道を段階的に探るのです。

「とがめる」と訳された言葉には、隠れていたことを明るみに出し、誤りに気づかせるという意味があります。ただ責めるのではなく、起きたことを神の愛の光の中に置くのです。「神はあなたの命を愛しておられる。そして、あなたが傷つけた命をも愛しておられる」と伝え、神の御心へ立ち帰るよう促すことです。

ただし、この御言葉は、傷つけられた人に一对一の対話や、危険な関係への復帰を強いるものではありません。暴力や虐待がある時には、安全を第一にし、信頼できる人や専門機関に助けを求める必要があります。赦しとは、被害をなかったことにすることではありません。適切な境界を設けることも、命を守るために必要です。

それでも、どうしても赦せない相手がいることがあります。自分の力だけで「きょうだいを得ること」を願い続けるのは困難です。しかし主イエスは、「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいる」と約束されました。

教会とは、主イエスが真ん中におられる集まりです。共に祈り、神の御心を尋ねる時、主イエスが赦しへ向かう力を与えてくださいます。罪を曖昧にせず、傷つけられた人を守りながら、悔い改めと和解への道を開いてくださいます。

教会が、人を責め立てて滅ぼす共同体ではなく、失われたきょうだいを取り戻そうとする共同体であり続けられますように。そのために、いつでも主イエスを真ん中に迎え、神の愛によって結ばれた赦しと和解の共同体として歩んでいくことができますように。